

明治工芸の登場 — 新技術とその応用





1 竹籠に葡萄虫行列図花瓶

初代宮川香山

一対

明治十年（二八七七）

陶磁

花瓶（右）高五七・〇、径二五・〇

（左）高五六・六、径二五・〇

本作品は、初代宮川香山（一八四二～一九一六）が明治十年（二八七七）に開催された第一回内国勸業博覧会に出品し、宮内省買上げとなった花瓶である。器表に竹を編んだ籠細工風に磁土を貼り付け、さらにその籠細工の隙間を縫うように葡萄の葉が貼り付けられている。そして、その葡萄の蔓の上を、大名行列に見立てて虫籠を担ぎ花や葉の威儀物を捧げ持つ、バッタやカマキリなどの昆虫の行列が細い輪郭線によって上絵付けされ、霞や箔散らし風の表現が金彩で描かれている。彫刻部分が高い写実性を備えているのに対し、絵付けの描写は写実的ではあるが陰影表現のない伝統的な日本絵画の画風としているのが特徴である。高台内には「真葛窓香山造」の染付銘がある。花瓶本体の他に、制作当初のものとみられる竹細工を模した素焼の台が附属する。香山の内国勸業博覧会出品作としては、同十四年の第二回内国博に出品された《褐釉蟹貼付台鉢》（重要文化財、東京国立博物館所蔵）がその代表作として知られるが、本作品はそれよりも早い年代の基準作例となる。

この時期の香山は「高浮彫」と現在では呼ばれている、花瓶などの器表に動植物を立体的に表わして貼り付ける彫塑的な作風を展開していた。香山の「高浮彫」作品は、海外における薩摩焼の人気を受けて、金彩と色絵による緻密な絵付けとは異なる独自の作風として生み出されたスタイルであった。本作品が興味深いのは磁胎で作られている点で、それに対して「高浮彫」作品は細かな貫入が入る薩摩焼風の陶胎素地で作られている。第一回内国博の出品作を収めた写真帖には、香山の他の出品作も写されており、本作品の他にも籠細工そのものの再現を試みた作品を制作していたことが判明しており、この時期の香山の繊細かつ巧緻な制作傾向を示している。



スズムシが入った虫籠を担ぎ、花の威儀物を捧げ持つバットの行列



灰色がかった淡い緑に色づけされた葡萄の葉は光沢がなく、透明釉をかけずに葉の質感が表わされている。



高台内の染付銘



竹の籠細工の隙間を縫うように葡萄の蔓と葉が表わされる。さらにその下を虫の行列が通る。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

## 明治美術の一断面——研ぎ澄まされた技と美

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 82

編集 宮内庁三の丸尚蔵館  
制作 株式会社 東京美術  
翻訳 黒川廣子  
発行 宮内庁  
平成三十年十一月三日発行

© 2018, The Museum of the Imperial Collections, Sanomaru Shozokan